

掲示から始まる遊び

誕生日表

その掲示物の意味は？



4歳児の保育室の壁面に飾られている「誕生日表」の一部。

四月当初、4歳児クラスの担任となったA先生は、「一年間、子供たちが、楽しいことをいっぱい見つけ、自分の中の好きをいっぱい膨らませてほしいな」と、願いました。「それに4歳児は遊びのイメージがどんなに広がる時期。見立て、想像する楽しさ、友達思いやイメージに触れる面白さを、沢山味わってほしいな」とも願いました。

そこでA先生は、遊びの後の時間を少し使って、子供たちが大好きだった絵本「はらぺこあおむし」をモチーフに、緑色モビールをあおむしに見立て、子供たちとやりとりを楽しんでみることにしました。

先生「ぼく（あおむし）、おなかへこべこー」、子供「いちご食べる？」子供「おだんごもどうぞ」やりとりしながら、準備していた素材を登場させます。所々に穴をあけたフェルト、紙類、ストロー。あおむしモビールが穴を通るたびに、「もぐもぐ、おいしいな」と保育者。今度は子供たちも、それぞれが好きなモビールを選び、お気に入りの素材を選び、試し、あおむしのおなかをいっぱいにしていきます。見立てはどんなに広がります。「私は（あおむし）ご飯が大好き」と言った女児のあおむしは、白やピンクの発泡材をいくつも貫通していました。

後日、子供たちの様子についてA先生にインタビューをしてみました。

拙者「誕生日表をつくらうって、子供たちとはいっ共有したのですか？」先生「子供には実は誕生日表をつくらうとは言っていないません。それよりもイメージに浸って遊ぶ楽しさを味わう時間として、そこを大切に計画しました。」

拙者「ここで製作したことが、普段の遊びに何か影響しましたか？」先生「自分なりに環境に関わり遊びを見つける姿が増えたと思います。モビールを素材に通していくということも、子供たちにとっては新鮮だったようで、素材との関わり方という面でもいろいろと広がったように感じました。」

あおむしになりきる子供や虫探しに夢中になる子供だけでなく、保育室にある素材に自分なりに関わり、見立て、そこから自由にイメージを広げているような遊びをつくる子供が増えたということでした。

保育者のここがすごい 環境への試行錯誤

四月は、学年が上がり、子供たちみんなが胸を躍らせて登園する時期です。胸につけたネームの色が、年少から変わったことがそれはもう誇らしくて「ほら見て」と言わんばかりの視線を保育者に送ってきたり、同じ4歳児同士でネームの見せつけをしたりする光景も決して珍しくありません。子供なりに互いの成長を感じ合い、今この時をまっすぐに喜んでいいる姿は、保育者だから出合える瞬間でもあります。そんな中、この「四月の誕生日表づくり」は、当然、法令化されたものではないので、必ずつくるものではないかもしれません。しかし、子供の生活を中心に据え、自己肯定感を育むことを大切に行っている幼児教育の現場では、一人の誕生日を一年間掲示し、ちよつとしたお祝いをするなどの取組を行っているところが多いと思います。

本事例の園では、二十数年前までは、三月頃に保育者が製作し、新年度に合わせて保育者が飾るという取り組み方だったようです。保育雑誌に掲載されている型を切り抜きそれを掲示するやり方です。「登園日までに掲示し終えなければ」そんな合言葉もあった。確かに、既成の型を生かした可愛い動物やお花で飾るよさもあるでしょう。でも、これで本当に子供たちの生活は豊かになっていると言えるのだろうか。環境を通して行う教育って、こういう細部を再考するのが大切だと思う。様々な問いが保育者の試行錯誤は今も続いています。遊びが充実することは、子供たちの生活が豊かになることです。